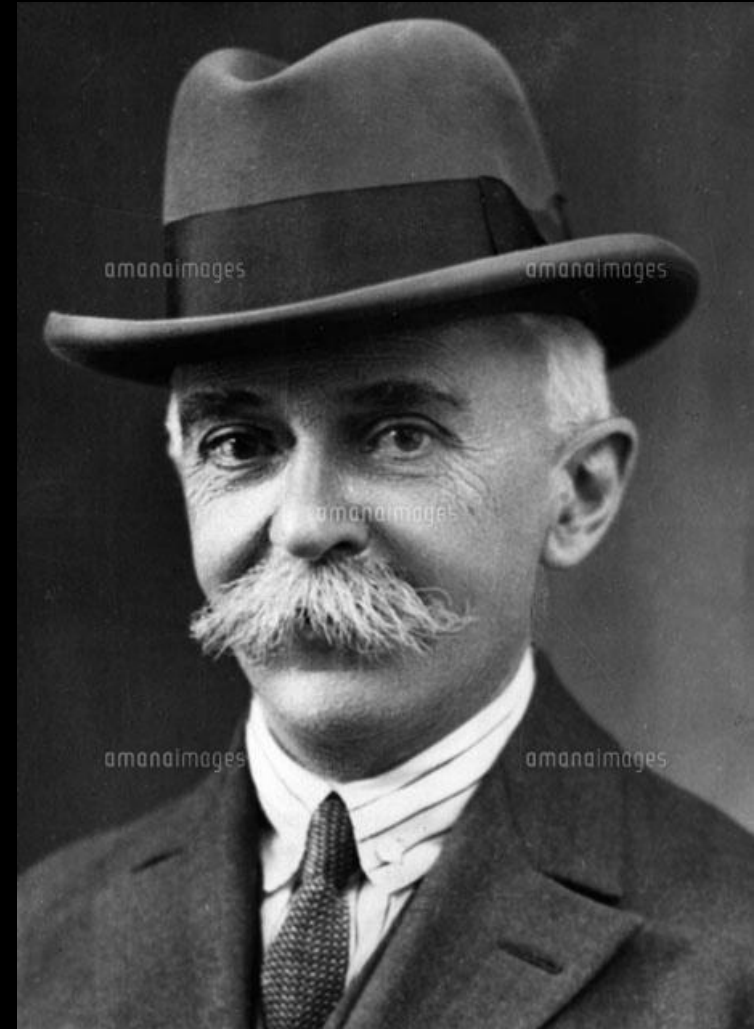


# オリンピックの原点

クーベルタン男爵(Pierre de Fr é dy, Baron de Coubertin, 1863-1937)の名前が誰もが思い付く人物である。フランスの教育者であったクーベルタンは、イギリスのパブリック・スクールに興味を持っていた。



クーベルタンは心身を鍛える教育に関心があり、イギリスのパブリック・スクールに関心を寄せたこともうなずける。

# パブリック・スクールとスポーツ

クーベルタンが着目したように、イギリスの教育の語る上で、パブリック・スクールとスポーツを抜きにすることはできないだろう。橋口稔編『イギリス文化事典』(2003)では、次のように説明されている。

パブリック・スクールでは、学業以上にスポーツによる肉体と精神の鍛錬が強調されたが、これも一般から見れば特殊例であった。一部特権階級の楽しみであったスポーツが一般化したのは、19世紀、とくにその後半においてのことである。長時間の労働で疲れた人間にとって息抜きといえ、飲酒とアヘン吸飲くらいしかなかった。19世紀中葉は禁酒運動が盛んになった時期であって、スポーツも飲酒にかかわるものとして奨励されたという面がある。

スポーツにおけるこの国の寄与は、美術  
におけるフランス、イタリア、音楽における  
ドイツに匹敵する。サッカー、ゴルフ、テニス、  
ホッケーなど、ほとんど世界中で行われてい  
るスポーツは、すべてこの国で誕生した。  
この国で行われないう野球にしても、その起  
源はクリケットを簡略化した、少年少女のや  
るラウンダーズ (rounders) であるという。

小池滋『英国らしさを知る事典』（2003）

スポーツという語の語源は“disport”だと辞書は教えてくれる。これは“dis”（分離や剥奪の意味を表す接頭語）と“port”（「運ぶ」「担う」の意味）が結合しもので、「気持ち運び去る」「気晴らし」「慰めるもの」「遊び」「娯楽」くらいの意味だった。その頭の部分の“di”がいつの間にかすい切れて、“sport”になってしまった、とのことである。

## 池田潔「自由と規律」(1949)

基本的な自由を與えられながらも、パブリック・スクールの学生はまず規律を身につけるため劇しい訓練を受けるが、その手段としてもっとも重視されているのが運動競技であることは周知の事実である。スポーツはイギリス人にとって信仰であるともいわれるが、ある意味では決して誇張ではないといえる。少なくともスポーツのもつ役割を無視してパブリック・スクール教育の価値は考えられないし、スポーツの行われないパブリック・スクール生活が如何なるものであるかは想像もつかないのである。さらに、スポーツをとまなわないイギリス人のものの生活が考えられないといってもよい。

佐々木隆『イギリス文化事情—文学・演劇・映画』(2005)

イギリス(大英帝国)の帝国主義が植民地を広げた過程は、スポーツが世界に広がった過程に似ていると言われている。しかも、サッカーの場合には、パブリック・スクールで生まれたスポーツでもあり、イギリス人の精神である「自由と規律」が体現されているとも言ってもよい。



# クーベルタンの心の変化

イギリスの学生たちが積極的に、かつ紳士的にスポーツに取り組む姿を見て感銘を受け、たちまちイギリス鼻肩になってしまいました。そして、「服従を旨として知識を詰め込むことに偏っていたフランスの教育では、このような青少年は育たない。即刻、スポーツを取り入れた教育改革を推進する必要がある」と確信した

ヨーロッパほど階級や伝統・慣習に縛られていないアメリカ社会は、古代ギリシャの都市国家の自由さに似ている

→ 国際競技会の構想が膨らむ

クーベルタンを刺激する別の動きも起きていた。ドイツ帝国による古代オリンピア遺跡の発掘である。考古学者ハインリッヒ・シュリーマンの指導を受けた発掘団は粘り強い作業を続け、1881年までに主要な遺跡の発掘を終えた。この発掘により、当時の欧州では古代への夢が語られていた。

こうした空気のなかで、クーベルタンは肉体と精神との融合の理想として古代ギリシャで行われていた「オリンピックの復活」への意志を固めていくのである。

人生において重要なことは、勝つことではなく、健闘することである。根本的なことは、征服したかどうかにあるのではなく、よく戦ったかどうかにある)と続きがある。しかも、この内容はクーベルタンが最初に使ったわけではなかった。この言葉は聖公会のペンシルベニア大主教であるエセルバート・タルボット (Ethelbert Talbot、1848-1928)が1908年のロンドンオリンピックの際にアメリカの選手たちに対しての説教をクーベルタンが引用し、それがクーベルタンの言葉として後世まで伝わったもののようだ。

オリンピックのモットーは“*Citius, Altius, Fortius*”（英語では“*Higher, Faster, Stronger*”）となる。「よい高く、よい速く、よい強く」はクーベルタンの言葉ではない。

# 嘉納治五郎

嘉納治五郎(1860-1938)  
はクーベルタン(1862-  
1937)と同じ時代を生きた  
教育である。



# IOC委員としてオリンピック・ムーブメントを推進

1909年にアジアで初の国際オリンピック委員会委員になり、アジアや日本のオリンピック・ムーブメントの推進に貢献しました。1912年のストックホルム大会に、嘉納先生は団長として、東京高等師範学校地歴科の金栗四三（マラソン）と東京帝国大学の三島弥彦（短距離走）を連れて参加した。

嘉納治五郎の教育精神はクーベルタンの目指すものの、オリンピックが目指すものと同一直線上にあった。



「嘉納治五郎の100年しごき」として、次の4点を紹介している。

- 1 柔道による人間教育
- 2 学校体育の充実
- 3 生涯スポーツの振興
- 4 スポーツによる国際交流・国際貢献

1893年から女子の講道館入門を許可し、更に1926年には講道館に女子部を開設しました。

嘉納は、「精力善用」「自他共栄」の考えを身につけた人材を社会に輩出することで、社会を改革することができる信じていました。これはクーベルタンのオリンピックの精神と共通する考えで、オリンピックの価値 (Excellence, Friendship, Respect - 卓越、友情、尊敬) を定着させ、平和な社会を構築するのに重要な視点といえます。

オリンピックで女性アスリートが初めて参加したのは1900年の第2回パリ大会であったことを考えると、1893年から女子の講道館入門を許可し、更に1926年には講道館に女子部を開設したことを考えると嘉納治五郎は国際的な女性スポーツの考え方よりもさらに先を行ってことになる。

6. このオリンピック憲章の定める権利および自由は人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治的またはその他の意見、国あるいは社会のルーツ、財産、出自やその他の身分などの理由による、いかなる種類の差別も受けることなく、確実に享受されなければならない。